

## <論文>『おもしろさうし』の条件表現：日本古語の 用法と比較しながら

著者	山崎 康弘
雑誌名	日本文学誌要
巻	55
ページ	2-12
発行年	1997-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019927">http://hdl.handle.net/10114/00019927</a>

# 『おもろさうし』の条件表現

—— 日本古語の用法と比較しながら ——

山崎 康弘

## 一、条件表現の種類と形式

条件表現とは、前句（前件）と後句（後件）との間に、条件と帰結にも称すべき関係が認められるものである。その条件となることからは、実際すでに起きたこととして取り上げる確定条件と、仮に起きると予想する仮定条件とに分けることができる。さらに、その条件と帰結との関係が順当であるか否かで、順接表現と逆接表現とに区別できる。

その形式を日本古語の用法において分類すると、次のようになる。

### （Ⅰ）動詞（動詞型助動詞）に接続する場合

- (a) 順接確定……已然形＋ば
- (b) 順接仮定……未然形＋ば
- (c) 逆接確定……已然形＋ど・ども
- (d) 逆接仮定……終止形＋とも

### （Ⅱ）形容詞（形容詞型助動詞）に接続する場合

- (e) 順接確定……已然形＋ば
- (f) 順接仮定……連用形＋は
- (g) 逆接確定……已然形＋ど・ども
- (h) 逆接仮定……連用形＋とも

『おもろさうし』において確認されるのは前記(a)、(b)、(c)の三形式のみである。沖縄古語には形容詞に已然形がないことも考慮すべきだろうが、すべて動詞（動詞型助動詞）に接続する形式でしめられている。<sup>(注1)</sup> また、逆接仮定条件(d)がみあたらず、逆接確定条件(c)も後にふれるようにその用例が少ないことから、実質的な中心は順接条件(a)(b)にしぼられてくる。その意味では、『おもろさうし』の条件表現は充実したものとはいえないだろう。

さて、その順接条件に関してはすでに先学による考察もあるが、<sup>(注2)</sup> 本稿では日本古語の用法と照らし合わせることで、改めて前記(a)、(b)、(c)の各用法について観察したい。

## 二、順接確定条件

奈良時代には、接続助詞「ば」や「ど・ども」を伴わずに、  
 用言の已然形だけで確定条件を表すことがあった。<sup>(注3)</sup>  
 家離りいます吾妹を停めかね山隠しつれ情神もなし<sup>(注3)</sup>

(万葉・三一四七一)

已然形が前句の述語であると同時に、後句への接続機能も擁  
 していたと解釈できる用法である。その後、平安時代になると、  
 この已然形単独の用法はほとんど見られなくなる。助詞による  
 接続の方が、後句との関係を緊密かつ明確に感じたからであろ  
 うし、同時にまた、已然形それ自体に接続の機能がなくなった  
 こともかわつていると考えられる。

一方、『おもろさうし』<sup>(注4)</sup>には奈良時代の語法も残されている  
 が、この用法はみあたらない。已然形単独の用法は、その劣勢  
 さゆえに受け継がれることがなかったであろう。

さて、助詞「ば」が接続して確定条件を表すとき、この形式  
 の内部は意味関係の上からさらにいくつかに分けることができ  
 る。

まず、前件（前句）が後件（後句）の前提条件となる場合で  
 ある。

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ<sup>(注5)</sup>

(万葉・一一四八)

二つのことからの継起的関係において、前件は後件に導かれ  
 る事実・状態に気づく契機となった動作・行動を示す。なかに

は、後件の事態の出現は偶然的で必ずしも前件を契機としない  
 ものや、後件が前件に呼応する形で現れるものもある。総じて  
 両者の関係は一回性であり、その継起には原因と結果にあたる  
 ような必然的關係のみられないのがその特徴である。

『おもろさうし』からは次のような例をあげることができる。

① ぎのわんのでだの

よほしみね ちよわちへ

大たかち みよれば

しろちやねの

よりなびく きよらや

又 ねのしまのでだの

(十五一一〇三)

② 一

きこへみやきぜんに

やせのはなさきに

よれば すでゝ

よむいきのかず

又 とよむみやきぜんに

(十七一一九九)

③ 一

しよりもりのぼて いけば

よのあけて

てだの てりよるやに

又 まだまもりのぼて いけば

(五一二二四)

これらの例に示されるように、前件で示される主体者の行為

を契機に、その主体者の遭遇した事態が後件に続くとき、後件で展開される事態に対しては、前件の主体者は何ら責任を持たない。ところが、前件の行為が後件の事態に何らかの方向性を与えるとき、そこにはある種の因果関係が意識されてくる。

④一 おゑやふその大や

大やこが かない

のぼて いけば

てだが ほこりよわちへ

又 またよしの大や

大やこが さゝげ

〈後略〉

(十五—一〇六一)

⑤一 うらおそいに ちよわちへ

たまみしやく さしゆわれば

もゝぢやは みちへど うらやみよる

又 世のつちに ちよわちへ

(十五—一〇七三)

③と同じ「のぼていけば」でも、④では「貢物を持つて上つて行つたので」と、後件での領主が喜ぶ理由をそこに求めることができる。同様に解釈すると、⑤も「玉御柄杓を差し上げたので」となる。しかし、ともにその判断は文脈にゆだねざるを得ない。

このように両様の解釈が可能なものもある。それらも含め、以下、前件が後件の契機となっていると思われるオモロの番号

を記す。(算用数字は巻数を、漢数字は通巻番号を示す。一首のオモロに対句項以外に複数の確定条件句が存在するときは、その該当する行数を○で囲んだ数字で示した。なお、それが対句を構成しているときは、最初の項の行数で示してある。)

2八〇・2八四・4一五四・5二六八・7三五八・7三五九  
7三七四・7三八五・8四〇八・8四六六・9四七九  
9四八四③・9四九二・9五〇三・9五〇五・10五一二  
10五二二・11五五九・11五七一・11五九一・11六〇二  
11六〇六・11六二五⑬⑭・11六四二・12六六六・12六八一  
12六九九・13七七二⑧・13七八二・13七九二・13八二五  
13八五六・13八八二・13九五五⑦⑬⑮・14一〇〇〇  
14一〇〇六・14一〇三二・14一〇三七・14一〇四三  
15一〇七四・15一一〇一・16一一三〇・16一一三一⑧  
16一一五三・16一一六七・17一一八八・17一二一六  
19一二八五・19一三〇四・20一三四六・20一三六〇  
20一三六八・21一四一一・21一四二六・21一四五五  
21一四六四・21一四七八・21一四八六・21一四八六⑪⑫  
21一四九九

先のオモロ(④⑤)のように、解釈によっては前件と後件の間に因果関係が認められてくるものもある。次にとり上げるのは、その関係が明確な場合である。前件が原因・理由を表し、その結果・帰結として後件が実現するという関係で、両者には因果性の必然的関係があると考えられる。

術もなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつづしろひ  
糟湯酒 うち啜ろひて  
(万葉・五―八九二)

『おもろさうし』からは次のような例をあげることができる。

⑥ 一 きこゑ大きみぎや

てにのいのり しよわれば

てるかはも ほこて

おぎやかもいに

かさり うちちへ みおやせ

又 とよむせだかこが

(二―四)

⑦ 一

きこゑあおりやゑや

あがるいのこがねあな

こがねはなの さきよれば

あおりやゑや

おれよ みぎや おれわちへ

又 とよむあおりやゑや

(四―一五九)

⑧

〈前略〉

又 あさどれが しよれば

又 ようどれが しよれば

又 いたきよらは おしうけて

又 たなきよらは おしうけて

〈後略〉

(十一―五一五)

以下、これに類すると思われるオモロの番号のみ記す。

1・1二・1三・1四・1三二・1三七・2八七  
3一・1一・3一六・3一八・3一九・3二〇  
3二・1一・3一二・3一三・3一六・3一七  
4一七五・4一九五・4二〇・4二〇三②⑫・4二〇八  
4二・1一・5二四八②⑦・5二五〇・5二五三・5二五四  
5二五六・5二五八・5二六一・5二六六・5二八〇・5二八三  
5二八四・5二八九・6二九四・6二九七・6三三三  
7三五五・7三五七・7三七〇・7三七七・7三八九  
8四〇三・8四四三・8四五四・8四七〇・9四八四②  
10五一七・10五二三・10五二四④⑫⑭・10五二八・10五三〇  
10五三一・10五三三・10五四二・10五四三・10五四四  
10五四五・10五四七・10五四八・10五四九・10五五〇  
10五五一・10五五三・11六一〇・11六一七・11六一九  
11六二三・11六二四・11六二七・11六三七・11六五一  
12六五二・12六五四・12六六四・12六八六・12六九七  
12六九八・12七一三・12七一四・12七二〇②⑪・12七四五  
13七四七・13七六四・13七七二②・13七七八・13七八八  
13七九三・13七九四・13八一〇・13八二二④⑧・13八三九  
13八四五・13八四九・13八五三・13八五五②⑩・13八六三  
13九四五・13九五〇・13九五二・13九五八・13九五九・13九六〇  
13九七二・13九七三・13九七五・13九七七・14一〇〇八  
14一〇二六・15一〇七二・15一〇七六・16一〇三二②  
17一一七六・17一一八三・17一一九三・20一三七七

20 一三八〇・21一四二九・21一四三一・21一四三九  
 21 一四四四・21一四四五・21一四四七・21一四八一  
 21 一四八二・21一四八八・21一四九七②②②

前記二つの用法は、前件がすでに事実として成立している。

次にみるのは、前件が現に実現していなくてもかまわない場合である。二つのことがらの継起が恒常的であることを示す用法で、そういう事実のもとではいつもこうなるという関係を表す。一種の仮定ともいえる用法で、後世「已然形＋ば」の意味が仮定条件を示すようになるのも、この流れを引くからと考えられている。<sup>(注5)</sup>

瓜食めば<sup>うりは</sup> 子ども思ほゆ 栗食めば<sup>きは</sup> まして俣はゆ<sup>しほ</sup>

(万葉・五―八〇二)

『おもろさうし』からは次のような例をあげることができる。

⑨一 まにしが まねく ふけば

あんじおそいてだの

おうねど まちよる

又 おゑちへが おゑちへど ふけば (九―五一〇)

⑩一 きこゑ大ぎみぎや

おれづむが たてば

さやはしもはしり

おしあけれよ ぢやうのしめ  
 たますだり

又 まきあげれよ すでもの  
 とよむせだかこが

又 わかなつが たてば  
 きこゑ大ぎみぎや

はつにしが おしいぢへば

〈後略〉

(七―三四九)

⑪

〈前略〉

又 せいくさ おしたてば

けお やりやり まぶら

又 せひやく おしたてば

けお やりやり まぶら

〈後略〉

(二―一七)

以下、これに類すると思われるオモロの番号のみ記す。

1 三一・2五四・3九七・6三二七・6三三〇・7三六二  
 7 三六七・8四六四・9五〇八・10五一八・12六六三  
 13 七八〇・13七九七・13八一七・13八三〇・13八七七  
 13 八九二・13九二五・13九六四②⑤・14九九四・14九九六  
 17 一二二七④・17一二二八・18一二五七④・18一二五八  
 19 一二八七・20一三七一・21一四〇四・21一四四一  
 22 一五一二・22一五四二・22一五四四②・22一五五四

さて、この恒常的用法は、先にみた因果関係を表す必然的用

法が一般化されたものとみられている。<sup>(注6)</sup> 特殊な一回性の関係が、その既成の事実の累積によって普遍的な関係へ進んだという解釈である。事実、必然的關係と恒常的關係の境界はいまいである。⑨のオモロは「真北風がまにまに吹いたので、国王様の御船が待たれる」とも解釈できる。⑩についても同様である。

理由・原因を表す必然的用法の場合は、前件における現に生じたという既成の認識が重要な役割をつとめていた。もちろんそれは、前提的用法についてもいえることである。ところが、恒常的用法では、前件における事態の実際上の生起にはこだわらない。この前件述語部の事実認定の希薄さが、恒常的用法における仮定条件との交錯を生みだす一因でもあると思われる。

その意識を反映してか、日本古語の用法では、平安時代に「用言十たれば」という形式が生まれ、鎌倉時代にかけて一般化する。助動詞「たり」を添えることで、前件における動作の完了性を明確にしたと考えられる。ここで注意したいのは、「用言十たれば」の形式が、いわゆる恒常的用法には用いられなかったこと。あるいは、用いられないことが恒常的用法に対する識別を容易にしているということである。

『おもしろさうし』において、条件接続に過去の助動詞が用いられているのは「みたれば かなしや」(十四—一〇三七)の一例のみである。動詞「みる」に助動詞「たり」が付くとき、他の十九例(連体形接続)ではすべて「たる」が「ちやる」に口蓋化している。その点で、「みたれば」という表現は熟したものではなかったことが推察される。

以上が、『おもしろさうし』において活用語の已然形に助詞「ば」が接続する全用例である。これらの状況をふまえると、沖繩古語においても「已然形十ば」の意味に、確定条件と仮定条件の混淆を来たしてくることは十分予測できる。しかし、少なくとも『おもしろさうし』の段階では、確定条件に仮定の意味の含まれないことはここまでみてきた通りである。

### 三、順接仮定条件

活用語の未然形に助詞「ば」が接続するとき、順接の仮定条件を表す。将来予想されることがらや、不明・不定のことがらを条件として表現するのがその基本的な用法である。

君が行もし久にあらば梅柳誰とともにかわが獲かむ

(万葉・十九—四二三八)

しかし、たとえば次のように、事実と承知したことがらを仮定するものや、<sup>(注7)</sup>逆に現実の事実と反することがらを仮定するものもあつて、未知や不明のことがらだけを条件としたものではないことがわかる。

かくばかり恋しくあらば真澄鏡見ぬ日時なくあらましものを

(万葉・十九—四二二一)

吾妹子が形見の衣なかりせば何物もてか命継がまし

(万葉・十五—三七三三)

一方、『おもしろさうし』では、このような既定的事実、あるいは現実に反することがらを仮定的にとらえている例はみあたらず

ない。次のように、まだ実現していない、時間的には未来のこととがらを条件としている。

⑫

〈前略〉

又 あけまとし ならば

むかうとし ならば

又 きみてづり ほこり

かみつかい このめ

〈後略〉

(四—二〇五)

さて、条件として表現される未知・不明のことからも、その実現性の認識度という点からは一様に律しきれない。疑問的なものもあれば、積極的に肯定するものまである。次にあげるのは、兵士達の合戦を前に、神女同士が霊力を競い合っているオモロである。相手にもし霊力があるならばと、そこには積極的な疑いがはさみこまれている。

⑬

一 さしきなわしろに

せ あらば

けおくなべ せらに

又 もたいなわしろに

又 されく ころた

せ あらば

又 どけく ころた

せ あらば

けおくなべ せらに

(十九—一二九七)

ところが、同じ予測に基づく仮定であつても、次の⑭ではそれがかなり現実的とみられている。「もし、あるならば」というような、「もし」に重点を置くのではなく、「あるときには」というような意味あい強い。

⑭

〈前略〉

又 きやかす さへずるな

はたす さへずるな

又 しられ事 あらば

なか とりやり しられ

(五一—二七四)

未知・不明のこととがらに対し、⑬のように疑問的に対峙している例は『おもしろさうし』にあまり見られない。その多くは、素材的にも現実としての可能性を高く意識したものが多く。次のオモロでも、直前の「てるかはす まぶれ」の存在によって、その実現性は積極的に肯定されている。

⑮

一 きこゑあぢおそいや

てるかはす まぶれ

まぶりよわば

もゝすゑ ちよわれ

〈後略〉

(七一—三六九)



さて、ここまでは前件に関したことである。次は、後件を中心に見てみる。

これは日本古語の場合にもいえることだが、後句の帰結には推量・意思・命令などの志向を導く傾向が強い。<sup>(注8)</sup>前出のオモロ例からも伺えるように、『おもろさうし』では特にその傾向が顕著である。後句を志向形（未然形）あるいは命令形で結ぶ例は仮定条件の六割をしめ、そのほか、次に示すような係り結びで強調されるものも多い。

⑩一 きこゑせのきみや

いのりやり ちよわば

せのきみしよ よは にせめ

又 とよむせのきみぎや

〈後略〉

(二二—一四〇七)

仮定条件であるから、当然それが成立しない場合のことも意識の内にはあるだろう。特に、その判断が下せず後件で具体的方向性が示されないとき、不安や疑問は増してくる。それがこれらの例にみられるように、後件で肯定的に展開したり強調したりすると、前句の条件が成否の二者択一的なものから成立への可能性が付与された確信的ものになってくる。

以上、『おもろさうし』では、前件、後件、それぞれが実現性という観点では共にその可能性が強調されていることがわかる。概して『おもろさうし』の仮定条件が、確定条件との距離をあまり感じさせないのもこのためであろう。そのように見て

行くと、「あすびよわれば」(二二—六一〇)と確定条件で表現されているものが、次の重複オモロ(⑪)では未然形に接続し、仮定条件を構成している。しかしこれが違和感を与えないのも、ここまでみてきたように、仮定条件で表現されていてその実現性が確信されているからと解釈できるわけである。

⑪一 國おそいくにもりが

あすびよわば

せだかこが つかひ

又 かでかわの中もり

あすびよわば

〈後略〉

(二二—一四八六)

#### 四、逆接確定条件

日本古語の用法では、活用語の已然形に助詞「ど」、もしくは「ども」が接続することで、逆接の確定条件を表す。『おもろさうし』では、活用語の已然形に「ども（どむ）」が接続する。

順接確定条件の場合と同様に、二句の条件関係をその因果性によって段階的に分類することもできるが、ここでは両句の対立性という点から考えてみる。言うまでもなく、異なる二つの事態を対照的に、ときには反対の事態を示すのが逆接条件の基本的用法である。『おもろさうし』からも次のような例でその対比性を確認することができる。

⑮一 あかかになが ふなやれ

ゑらぶむすひよもへ

いみやこより

めづらこゑ やらに

又 おゑましが ふなやれ

又 たびに たつ あんは

くれかてや あれども

いみやこより

めづら

(十三—八五八)

ところが、二つのことがらに、対照性・対比性といった意識の感じられないものがある。

⑯一 げらゑすづなりぎや

やゝのき(よ)ら しよれども

あがなさと

みこゑ あわさたな

又 み物すづなりぎや

み物きよら しよれども

〈後略〉

(十四—一〇一一)

「やゝのきよら(美しい踊り)」をしていることと、「あがなさと みこゑ あわさたなへ(我らの領主様と声を合わせて欲しい)」という願いは対立しない。両句の結びつきはむしろ単純なものに理解される。

『おもろさうし』の逆接確定条件は用例が少ない。これらのほかには次の五例(十首)を数えるのみで、オモロ語としての特徴を導きだすことは難しい。逆接の仮定条件が登場しないことも考え合わせると、逆接的な表現自体が『おもろさうし』の文学性には要求されなかったとみる方が妥当かもしれない。

いきよれどむ(19—一三—一六)

しらねども(13—七九八・13—九六一)

たちよれども(1—三九)

みれども(1—七・3—一二五・17—一七八)

やれども(む)(10—五三五・11—五九八・21—一四五二)

では、⑯にみられるような対立性の希薄なものは、逆接条件のなかにあつては異質なものののだろうか。日本古語の用法においても、二つの事態を対照的に示すのがその中心である。しかし一方で、数は少ないが対照性の低い存在も認められる。<sup>(注9)</sup>次に示す後者の例がそれである。このことから、『おもろさうし』の用法が日本古語のそれと共通したものであることがわかる。

毎年<sup>としは</sup>に梅は咲けどもうつせみの世の人君し春なかりけり

(万葉・十一—一八五七)

人毎<sup>ひとごと</sup>に折り挿頭<sup>かざ</sup>しつつ遊べどもいやめづらしき梅の花かも

(万葉・五—八二八)

## 五、むすびにかえて

### ——条件接続による表現のひろがり——

最後に、文と文の結びつけという観点からも条件表現のもつはたらきにふれておきたい。

『おもろさうし』では、二文の接続はもっぱら接続助詞による。とりわけ助詞「て」の活力は旺盛で、動詞の連用形に接続して接続形を形成するにいたっている。しかし、この「て」のはたらきは単に二つの句を列挙し、並列的に結びつけるだけのものにすぎない。

一方、「ば」による条件接続では、そこに論理的な認定が介入する。ここまでみてきたように、後件が実現するには前件の影響があり、前件との関係において後件が成立するという認識である。よって、その結合の度合いは高く、これは助詞「て」による接続などとは一線を画するものである。

この相違に関しては、「て」「ば」両助詞の機能的差異のほか、連用形と已然形（未然形）という活用形のもつ機能も合わせて検討すべきであろう。が、ここではその問題はさておき、この「ば」による条件接続がオモロの歌形のなかではたした役割について考えてみたい。

オモロから琉歌への流れとしては、次のような八、八、八、六調への歌形の整えがみられるものである。オモロの存在が指摘されている。<sup>(注10)</sup>（数字は音数を表す）

②① きこゑくになおり

8

いりて みづ こゑば 8  
みづ なきやん まみき 8  
いぢやす まくに 6  
又 とよむくになおり 8

（十四—一〇四三）

八八八六の四句三十音への定型化もさることながら、ここでは対句部・反復部という構造の二重化を意識させないことに注意を向けたい。オモロの一節がそれだけで完結的なまとまりを見せている。そのためには、対句部と反復部の緊密な結合（融合）が要求されたはずで、その背景には「ば」による条件接続が有効的に機能していたと思われる。その意味で、②①の前段階として次のようなオモロがその一役を担っていたと考えられるだろう。（\*は反復部を示す）

②① きこへさすかさは 8

まぶるきみやれば 8

\* くもこいろ てりや 8

あがて ちよわれ 6

又 とよむ大きみや 8

かいなできみやれば 9

〈後略〉

（四—二〇三）

②① まはへすづなりぎや 8

まはい さらめけば 8

「たう なばん かまへ 8

* 「つで みおやせ		
又 おゑちへすづなりぎや	8	
おゑちへ さらめけば	8	(十三—七八〇)

本稿では日本古語の、特に『万葉集』との比較を通して、『おもしろさうし』の条件表現をみてきた。「已然形＋ば」の形式においては、確定条件として互いに共通する用法が確認された。「未然形＋ば」においても同様で、とりわけ現実への可能性が強調された一面を『おもしろさうし』にはみることができた。実現性が保証された順接仮定条件と、不成熟な逆接条件とは表裏を成す。これは、『おもしろさうし』の根底を流れる願望・希球に満ちた表現性とも見合うものであるといえよう。

注1 『おもしろさうし』の逆接確定条件には、助動詞「ず」の已然形に接続するものが一例(二首)ある。日本古語の用法では、助動詞「ず」も形式(II)に含めて考える。よって、厳密には逆接確定(G)の存在も認めるべきかも知れないが、基本的な形容詞および形容詞型活用助動詞への接続例がないことから、形式(I)だけと考えてよいと判断する。

注2 外間守善「——中世文献にあらわれた——琉球方言の動詞」(『国語学』四二号 一九六〇年八月)。かりまたしげひさ「オモロの条件形」(『沖縄文化』沖縄文化協会創設四〇周年記念誌 一九八九年十二月)など。

注3 山田孝雄『奈良朝文法史』(一九五四年、宝文館出版)第三章第三節

注4 たとえば、奈良時代にのみ用いられた格助詞の「な」「つ」、間投助詞の「い」の用法などが『おもしろさうし』には残っている。

注5 佐伯梅友『上代国語法研究』(一九六六年、大東文化大学東洋研究

所)「二三の助詞をめぐるて」  
 注6 阪倉篤義「条件表現の変遷」(『国語学』三三三号 一九五八年九月)  
 注7 佐伯梅友が「修辭的仮定」と名づけたものである。『万葉語研究』(一九六三年、有朋堂)『淀むとも』考  
 注8 山口堯二『古代接続法の研究』(一九七五年、明治書院)第六章「仮定条件法の特徴」  
 注9 山口堯二(前掲書)にいう「前置性」の用法である。第四章「已然形＋ど・ども」の確定条件法  
 注10 外間守善『南島文学論』(一九九五年、角川書店)第四章第一節第二項「琉歌の成立」

(文学部講師)